

船上からの陸地景認識に関する基礎的研究

総合研究大学院大学文化科学研究科* 正会員 卯田宗平

立命館大学理工学部** 正会員 笹谷康之

1) はじめに

山アテ行為を用いる漁師達は、陸地景の重なり具合や離れ具合といった特徴的一瞬や継起的变化を丹念に見分けている。こうした船上からの視体験を読み解くことは、新たな視点場の発見や計画概念を提供するという観点において、現代の景観体験にも十分展開可能である。そこで本研究は、船上からの景観体験、特に山アテ行為(1)に焦点をあて、漁業活動における山アテ行為の機能を明らかにする。船上からの陸地景認識の特性(どのような陸地景に対し、どのような呼称を付与し、そこには如何なる認識体系があるのか)を明らかにする。船上景観体験に対応した景観計画のための基礎的な知見を収集する。

2) 研究の方法と調査対象地の概要

調査内容は主に、漁業の現況や漁法、山アテに関する知識を収集する聴取調査と、一人の漁業者が日々の漁業活動で如何に山アテ行為を運用しているのかを聴き取る個体追跡調査を行った。調査対象地は、予備調査において漁民の山アテ行為が確認できたこと、また各種地図、文献がそろっていることを理由に、琵琶湖中の沖島(滋賀県近江八幡市沖島町)を選定した。

3) 漁業活動における山アテ行為の機能

本項では、漁業者への個体追跡調査を通して、実際の漁業活動における山アテ行為の役割を明らかにする。著者は、平成11年10月1日から10月30日まで、ゴリ漁を行う漁師を対象に個体追跡調査を行った。この調査結果から、水上での漁業活動における山アテ行為の役割を、以下の4点導き出した。

湖底の地形や障害物の位置を水面上で正確に把握する『水上での一点測定』としての機能がある。

水上での移動の際、自船から岸までの距離を判断する『移動距離の確認の為の指標』としての機能がある。

漁業者が水上での移動の際、見通し線上が『移動の為の経路』として機能している。

二本の見通し線の交点が、変化の乏しい水上での『局所的な認識単位』としての機能をもっている。

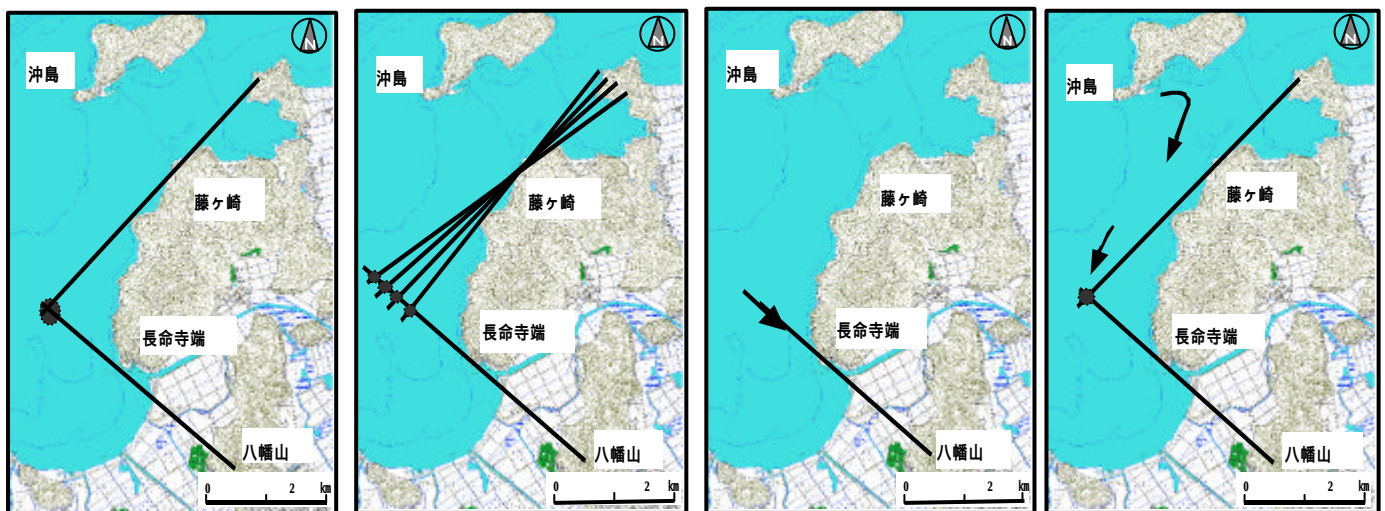


図-1 > 水上での一点定位

図-2 > 移動距離の確認

図-3 > 移動の経路

図-4 > 局所的な認識単位

Keyword; 景観認識、山アテ行為、船上景観体験、名づけ

連絡先; * 〒240-0193 神奈川県三浦郡葉山町(湘南国際村) TEL0468-58-1500

** 〒525-8577 滋賀県草津市野路東 1-1-1 TEL077-565-1111

4) 陸地景認識に関する諸特性

一連のアテ呼称の分析を踏まえ、本項では、漁業者の陸地景認識体系、つまり、彼らはどのような陸地景にどのような呼称を付与し、そこには如何なる認識体系があるのかを明らかにする。

アテ呼称を手がかりに、漁業者の陸地景認識を解明していく過程で、「陸地景の形状」と「呼称の付与行為」の間には、根本的な関連があることが分かる。すなわち、船上から見て「山」型には、「ササ」「ササ」のように「相貌的連想に基づく呼称」が付与されていることが多いのに対し、「崎」型には、「藤ヶ崎」「蜷ヶ崎」のように「その地点の出来事・故縁などに基づく呼称」が多く付与されている。

	図		呼称	特徴	変化
「山」型			山頭山	対象への相貌的連想	「もの」化
	<頭山>	<ボンサン山>			
「崎」型			藤ヶ崎、鯉ヶ崎	その地点の出来事・故縁	「こと」化
	<蜷ヶ崎>	<長命寺端>			

表-1 > 陸地景の形状と付与呼称の関係

	形状	示差	連想	呼称	変化
「山」型	形状が富む	示差しやすい	連想が容易	相貌的連想に基づく	「もの」化
「崎」型	形状が一樣	示差しにくい	連想が困難	出来事・故縁に基づく	「こと」化

図-5 > 「山」と「崎」との形態的相違と付与呼称との関係

すなわち、「山」型の透視形態は、呼称に「もの」が表現され、「崎」型のそれには、「こと」が示される。(2) <図5>。それには、以下の理由があると考えられる。

透視形態の示差的特徴がもたらす相貌的連想の難易差

<図-5 上部>の「山」型は、どちらも比較的容易に識別できる。これは、総じて山頂付近は、さまざまな形姿をしており、示差しやすいからである。陸地景の形状差が顕著である場合、そこから連想される様々な物「もの」を容易に当てはめることができる。一方、<図-5 下部>の「崎」相互の識別は、極めて難しい。これは、「崎」が、船上からどれも同じように見えることに原因がある。対象物が同じように見えるのであれば、その地点固有の相貌的知覚がしにくい。したがって、呼称命名の契機を、その周辺で行われている事柄やエピソードといった「こと」に依っているのである。まとめると、<表-1>になる。

5) 景観計画への示唆

船上からの景観体験に立脚した景観計画のための基礎的な知見をまとめると、以下のようになる。

船上景観体験に対応した景観計画の考え方として、相貌的連想や輪郭線の重なり具合が見て取れる地点などを『水上鑑賞地』として設定可能である。また、船上からの眺望範囲である海岸から背後の山並みまでを一つの『景観形成単位』として捉える必要がある。そのなかでも、相貌的連想を志向する地形・地名は、『船上景観資源』として重要である。

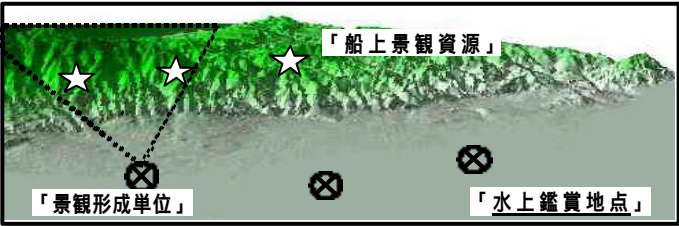


図-6 > 船上景観体験に基づいた景観計画の考え方

6) おわりに

本研究は次の三点を明らかにした。 漁業活動における山アテ行為の機能を四点明らかにした。 透視形態の違いによる付与呼称の変化を明らかにし、その理由が「透視形態の示差的特徴がもたらす相貌的連想の難易差」であることを導き出した。 船上景観体験に対応した景観計画のための基礎的知見を収集した。

<参考文献> (1) 桜田勝徳 (1968) 「漁撈の伝統」、岩崎美術社。五十嵐忠孝 (1977) 「トカラ列島漁民の“ヤマアテ”」(渡辺仁編「生態」)、雄山閣出版 他(2) 丸山圭三郎 (1983) 「ソシールを読む」、岩波ミナブックス、ヘルナー・マルクス著、佐藤真理人他訳 (1994) 「ソシール現象学入門」、文化書房 他